

フレッド・M・ドナー著 後藤明監訳 亀谷学・橋爪烈・松本隆志・横内吾郎訳

『イスラームの誕生——信者からムスリムへ』

慶應義塾大学出版会、二〇一四年

医王 秀行 東京女学館大学国際教養学部教授

このたび初期イスラム史研究の世界的権威による著作が日本語で読めるようになったことを心から喜びたい。本書では、ムハンマドの布教に始まる、黙示録的世界観を強く意識した初期の信者運動が、ユダヤ、キリスト教徒をも含めた開かれた運動から、後世になってコーラン、ムハンマドを信奉する信徒（ムスリム）に限定された運動へと変遷する過程が論じられる。初期の信者の共同体は、従来イメージされているようなユダヤ、キリスト教とは一線を画した独立した宗教共同体ではなく、普遍的・一神教的性格を有していたという。「ムスリム」はそもそもコーランではユダヤ教徒やキリスト教徒をも包括する用語であったが、ウマイヤ朝期になって、コーランの啓示のみ従うイスラム教徒という、現在一般に使われている限定的な意味を持つようになったとする。

評者は本書の翻訳が出る以前から英語の原本を入手していたが、手に取った最初の印象は、装丁も簡素で、中をペラペラめくると注は省略されており、一般向けの概説書に毛が生えたようなものと勘ぐってしまった。そのまま書棚に入れたまま、利用することはなかったが、今回の翻訳を読むことで、そうした先入観はまったくの誤解であることが判明し、自らの不明を大いに恥じることとなった。一般向けの概説書どころか（筆者はあくまでそのつもりで書いているのだが）、イスラム史研究者向けの研究書といつてよいくらいに自身の濃い書籍である。大学生レベルでは、ある程度の歴史的知識がないと理解は難しそうであるし、専門家にしても最後まで読するには根気がいるのも事実である。まずは訳者の労力に大いに敬意を表したい。

筆者のドナーは初期イスラム史の権威であり、現在、シカゴ大学で教鞭をとるかたわら、北米中東学会会長という重責を務めている。彼の略歴、業績

の詳細は「訳者あとがき」に譲るが、彼が三五―六歳で出版した『初期イスラムの征服』*The Early Islamic Conquests*（一九八一年）は、長らく彼の代表作として知られ、今でもアラブの大征服を研究する上では必須の文献である。タバリーの『預言者たちと諸王の歴史』の英訳事業では第一〇巻の「アラビアの征服」*The Conquest of Arabia*（一九九三年）を担当しているが、これはムハンマド死後、アブー・バクル治世中のリッダが中心の内容となっている。

ドナーのもともとの研究スタイルといえば、コーランに加え、イブン・イサーク、バラズリー、クーフイー、タバリーといった八―一〇世紀の代表的なアラビア語史料を主に利用し、丹念に各種文献を読み比べていくことで史実を積み上げていくという、きわめてオーソドックスで実証主義的なものであった。

「日本語版への序文」（以下、序文）や「訳者あとがき」にもあるように、近年欧米ではムスリム史料の信憑性を根本から疑い、ユダヤ、キリスト教文献や碑文、貨幣資料などを用いて、特にイスラムの発生要因、信仰の拡大理由などについて、これを根本から書き直そうという一大潮流が生まれている。ドナー自身も反省するところがあるらしく、序文には「一九七〇年代以前、イスラームの起源に関する研究は活気を失い、およそ刺激のない分野であり、専門的に研究する学者も少なく、目新しい考えが聞かれることも滅多になかった」と述べる。クローネ、クック、ワンズブルーといった研究者が次々に打ち出した新たな仮説は大きなうねりとなり、ドナー自身も巻き込まれていくことになる。彼が二〇〇二―二〇〇三年に出版した「信者からムスリムへ」*From Believers to Muslims*で展開した仮説は本書のメインテーマ

をなすものであるが、概略すれば、もともとイスラムはユダヤ教徒、キリスト教徒をも包括する一宗教の一大刷新運動として始まったが、ウマイヤ朝期ともなるとイスラム教徒に限定された運動に収縮していったというものである。本書の原題は *Muhammad and the Believers: At the Origins of Islam* であるが、「信仰者からムスリムへ」という副題は、訳者の工夫によるものであり、本書の性格を的確に示したものである。

したがって本書を読む上であらかじめ留意しておくべき重要な点は、ドナーの学説は近年の「修正主義的な学術成果」に多分に触発されて生み出されたものであるということである。欧米のこうした刺激的な研究活動については、「あとがき」でも触れられているように、従来、日本では、うわさ程度以上には、ほとんど知られてこなかったし、専門家が体系的に紹介、議論することもなかった。この点は初期イスラム研究者として評者にも反省はあるが、正直なところ、そこまでとても手が回らなかったというのが実情である。一次資料の翻訳（特に英訳）、研究文献の膨大な蓄積、辞典、工具類の整備等において欧米の研究環境は飛躍的に伸びつつある一方、総じて日本のイスラム研究は、ガラバゴスの洞窟で外部の情報も絶たれたまま特異な進化を遂げたようにもみえる。今回の翻訳成果は、洞窟に一条の光を呼び込むもののようにも思え、訳者の見識の高さを示すものである。

ただし、近年の欧米の修正主義的な学問傾向については大いに批判の余地があり、それは一次資料の本質的な性格を理解していないことからきているように思われる。この点についてここで詳しく論じることはできないが、とにかく、こうした研究潮流に多分に影響を受けた本書であるので、利用するにあたっては批判的な視点も必要である。本書の概要は以下のとおりである。

日本語版への序文

はじめに

第一章 イスラム前夜の中東

第二章 ムハンマドと信仰者運動

第三章 信仰者共同体の拡大

第四章 共同体の指導者の地位をめぐる争い

第五章 イスラムの誕生

訳者あとがき

補遺A ウンマ文書

補遺B 岩のドームの碑文

用語集

注釈および参考文献案内

索引

本書を貫く重要な論点は二つあり、それは「はじめに」において示される。ドナーは、イスラムの発生について社会・経済的要因や「民族主義的」性格を強調する欧米研究者の従来の主張に異を唱え、イスラムが純粹に救済を求めするための宗教運動であること、そして世俗的イメージの強いウマイヤ朝こそがイスラムの最大の援助者であったと述べる。

イスラム出現の背景を理解するためには、当然のことながら、前イスラム時代の中東や特にアラビア半島の宗教潮流を把握することが必要となる。第一章はビザンツ帝国、ササン朝ペルシア、アラビア半島の社会構造、歴史的事件、宗教思想が詳細に語られる。内容は高度であり、各所に新たな知見、近年の欧米研究者による研究成果が盛り込まれているが、メッカ交易を零細で小規模なものとする点は、クローネの学説に引きずられすぎている印象もある。六世紀にビザンツ領内で黙示思想が広まり、最後の審判と最終的な救済を待ち望む宗教環境が存在していた点や、アラビア半島のキリスト教徒、ユダヤ教徒が終末思想に影響されていたと推測する部分は、本書の展開と大きな関わりを持つものである。

第二章では、ムスリム伝承に基づく、一般によく知られている、ムハンマドの生涯の概要が示される。その次に史料の信憑性の問題が語られるが、これは個々の研究者の研究姿勢を決定づける非常に重要な部分である。ムハンマドの生涯を扱ったムスリムの伝承史料は、それが比較的后代に成立したことから、後代のムスリムがある意図を持って創作したものではないかという疑念が常に付きまとい続けている。近年ではムハンマドの存在をフィクションとして否定したり、コーランの啓示がイラクあたりを中心に二〇〇年以上の年月をかけて形成されたといった過激な議論さえも存在する。こういった主張はドナーによって明確に否定される。彼のスタンスは、ムスリム伝承には奇蹟譚など明らかな作り話、疑わしい記述は存在するものの、すべてを否定するのではなく、またすべてを盲目的に採用するのでもなく、事実とそうでないものを区別していくべきであるという、しごくまっとうなものである。し

かし、その事実を見極めるための明確な方法論が確立していないのが現状であり、彼はムハンマドの信仰運動を語るにあたってムスリム伝承を用いるに非常に慎重である。一方で、コーランがムハンマドの宣教の初期に遡れるものであるのは確かであることから、コーランの情報のみを忠実に扱うことが最良であると結論づけている。また、彼は一つの解決策として、量は少ないが、比較的古い非イスラム史料の活用を提唱している。

次に初期の信仰者運動の特徴がほとんどコーランに沿った形で論じられる。コーラン中に「信仰者」(ムウミン)が「服従者」(ムスリム)にくらべて圧倒的に多く用いられていることに着目する。この二つは同義語ではなく、初期の信者は自らを「信仰者」として位置付けており、信仰者運動は、神の唯一性、最後の審判、預言、天使といった概念を信じることから始まったとする。また信仰者運動は、「一神教運動」ばかりでなく「敬虔主義運動」として特徴づけられ、具体的には礼拝とザカートやサダカ(もともとは貧者への贈与、喜捨でなく、罪の浄化としての支払であったとする)、断食、巡礼などの実践が求められた。ただし、それは古代末期のキリスト教の禁欲主義とは無縁であったとされる。

信仰者たちは、終末の日、最後の審判の到来を差し迫ったものとして切実に認識していたとし、その根拠にコーランの多くの章句が提示される。そしてドナーは、自己責任としての個人的な救済よりも、信仰を持った正しい共同体の一員としての集団的救済という面(ただしコーランの根拠は弱い)を強調する。信仰者たちは救済を求めてこうした共同体の建設に邁進したというのである。メディナ時代になるとコーランでは終末に関する啓示は少なくなるが、これは終末感が薄れたのではなく、むしろ目の前で現実に起きる劇的な出来事、軍事的成功が、最後の審判を導く筋書きの一部として信者に認識されていたと説明される。こうした信仰者の運動は、広義のヒジュラ、ジハード思想をもとに、攻撃的な性格を持って不信者との軍事的衝突へと導かれ、究極的には審判の筋書きの終着点である全人類の救済へとつながるものであったと論じる。

第三章では、ムハンマド死後の信仰者共同体の拡大を扱う。史料はコーランのほかに、ムスリム伝承を慎重に用いざるを得ない点が指摘される。また、碑文、貨幣、パピルス文書の証拠資料としての重要性が、「雲間からわずかに見えた星々」という比喻で強調される。

リッダ戦争では信仰者たちのジハード思想に強く支えられ、長期駐留型の

戦争体験は、討伐軍を従来のアラビア半島にはない性格を持つ軍隊に鍛え上げた。リッダ戦争の結果、アラビア半島のすべてが信仰者共同体へと統合された。その後のビザンツ、ササン朝の領域における征服活動は、「イスラーム」の征服活動ではなく、信仰者たちの「一神教的な改革運動」に基づくものであり、そのことが被占領地における支配がスムーズに進んだ要因であったと説明される。キリスト教のいくつかの同時代文献は、征服軍の略奪、破壊など「暴力的な征服モデル」を記しているが、実際のところ、考古学調査では町や教会の破壊された跡がほとんど見いだせないという。ドナーもこのあたりの矛盾はうまく説明できていない。征服後、教会も存続し、新たに建設された。アラブの信仰者と礼拝場所を共有してさえた。先住のユダヤ、キリスト教徒は、税を払うだけで、信仰者の共同体に包括された。

一部の記述には疑問が残る。アブー・スフヤーンやアムル・ブン・アルアースがムハンマドの布教以前からシリア方面に不動産を有していたとか(九八頁)、リッダで討伐された部族員の多くが奴隷となり、ハニーファ族数千人が奴隷となってヤマーマにあつたムアーウィヤの農園で働いていた(二〇四頁)、あるいはカリフたちが征服に従事する軍隊のためにメディナ東方に補給基地を有していた(二〇七頁)、などの説は、近年の他学者の研究成果を紹介していると思われるが、こういった事例こそ、伝承史料の信憑性を疑うべき性質のものであろう。

後半ではアブー・バクルからウスマーンの時代にかけての大征服事業が詳しく説明されるが、依拠する史料は、後世のムスリムの伝承に基づくものである。結局のところムスリム史料を抜きにしてこの時代の歴史は語れないという印象を残している。そしてエルサレムの占領は、ドナーの論ずる「最後の審判にむけての終末論的筋書き」にとって重要なはずであるが、残念ながら彼はそれを証明する史料の根拠を見出すことに成功していない。

第四章は、カリフ・ウスマーン暗殺とアリーのカリフ位就任後に起こった第一次内乱と、第二次内乱が語られる。ムハンマドの死後、アブー・バクル、ウマルの治世における信仰者運動の拡大とその驚異的な成功は、まさしく神の意志が地上に現出しているように感じられたかもしれない。しかしウスマーンの治世になると、戦利品や俸給の減少、一部の有力者による大土地所有、特定のクライシユ族に偏る要職人事など、社会矛盾が顕著になってくる。そしてドナーが強調するのは、「高潔なる敬虔さの理念」が指導者たちによりないがしろにされていることに対する信仰者たちの激しい怒りであ

る。アリーは信仰者運動を立て直すべくウスマーンの路線の修正を目指したが、スイツフィーンの戦い後にはハワーリジユ派の離反に見舞われた。ドナーによれば、「最初のハワーリジユ派が有していた激烈なまでの敬虔さと攻撃性は、信仰者運動における原初の敬虔主義的な衝動が、最も純粹なかたちで生き残ったものであったという。ウマイヤ朝は世俗的なイメージの強い王朝であるが、建国者ムアウィヤの治世には、シリアのキリスト教徒やコプト、そしてゾロアスター教徒の多くが書記を務め、ムアウィヤが重用したシリアの有力部族カルブ族は単性論のキリスト教徒であった。このことから、ドナーは、初期の信仰者運動がアラブだけでなくキリスト教徒やユダヤ教徒にも開かれていたように、信仰者運動の普遍的な一神教の要素がこの時代にも継続していたと論ずる。他の一神教徒から明確に区別された「ムスリム」の自己認識が一般的になるのは第二次内乱以降のこととされる。第二次内乱については歴史経過が詳しく説明されており、他の邦語文献には見られない情報が貴重である。

第五章では、第二次内乱を平定したウマイヤ朝カリフ・アブドゥルマリクの時代にあつても黙示録的な運動の性格が持続していたことが示される。アブドゥルマリクが内乱終結後に再開した広範囲にわたる遠征の背後には、来るべき最後の審判において最後の支配者が神に統治権を引き渡すという筋書きがあつたことが示唆される。そして最後の審判の出来事が起きる際の舞台装置としてエルサレムに「岩のドーム」が建築された可能性を論じる。

次に、内乱後の信仰者共同体の運動が、ムスリム（我々が今日使う意味でのイスラム教徒）に限定された運動として再定義されていく過程が描かれる。ムスリムやムウミンといった用語が、コーランを信奉する信徒にのみ限定されて使われるようになり、他の一神教徒（ユダヤ、キリスト教徒）と明確に線引きされたとする。キリスト教の三位一体の教義の存在が要因の一つとして挙げられている。ムハンマドの地位が強調され、貨幣に刻印されたシャハダには「ムハンマドは神の使徒」の文句が加わる。そして預言者の言葉（ハディース）が収集、記録されるようになり、イスラムの起源の物語（つまり預言者ムハンマドの物語）が形成されていく。母音記号、弁別点が付けられたコーランの正典が編纂され、コーラン（三八章二六節）でダビデ（エルサレム設立者でもある）に用いられた「ハリーフ・アッラー（神のカリフ）」の称号もカリフに初めて用いられた。礼拝から断食、巡礼などの儀式もムハンマド死後の数十年以上かけて定型化されたという。また、この

頃になると信仰者運動の成功の副産物として政治的アラブ意識が芽生えるようになったが、それはあくまでも結果であり、イスラムの発生、拡大がアラブの民族運動でなかったことが強調される。

巻末の参考文献案内は初期イスラム研究者にとつては非常に利用価値の高いものである。日本の研究者が網羅的に史料を探索するには限度があり、この部分だけを目当てに購入してもよいだけの価値があるように思える。

近年、欧米では歴史像の大きな転換を目的とした研究が多いことはすでに指摘したところであり、本書の内容も研究者に多大な刺激を与え、歴史研究の醍醐味を感じさせるものである。ただしドナーが本書で展開する学説については議論が大雑把で、多分に飛躍している点などは様々に批判が可能であろう。

まず、ほとんどの読者が感じるであろう疑問は、黙示録的世界観、最後の審判の怖れといったものが、どこまで各時代のイスラム教徒の心理を占めていたのだろうか、という点である。ムハンマドの政治的成功や大征服事業に見られる軍事的成功を説明するにあたって、こうした信仰的側面と、従来の研究者が重視してきた社会的側面のどちらを重視すべきであるのか。ドナーは前者の側面を強調するが、例えばムハンマドの始めた信仰者運動を語る際に、彼の扱う史料がほとんどコーランに限られているため、さまざまな複合要因が絡み合うはずの歴史を語る上ではやはり説得力が乏しい印象はぬぐえない。

ムハンマドの始めた信仰者運動が一貫してユダヤ教徒やキリスト教徒にも開かれていたとするが、メディナ時代のムハンマドがユダヤ教徒と決裂し、カイヌカー族、ナデイル族を追放したり、クライザ族の成年男子を処刑した事実はどう考えればよいのだろうか。晩年の別離の巡礼に参加したユダヤ教徒やキリスト教徒がいったいどのくらいいたというのであろうか。ムハンマドの布教活動の性格を語るにほとんどをコーランに依拠し、それ以外のムスリム伝承を無視する研究手法の限界が露呈しているようにしか評者には思えてならない。その一方で、ムハンマド没以降、正統カリフ時代からウマイヤ朝にかけての歴史を語る上で依拠するのはほとんどがムスリム史料である。これにも一貫性がないような印象を受ける。要は近年の修正主義的歴史研究の潮流において『預言者ムハンマド伝』などムハンマド関連の諸史料を扱う上での十分な方法論が確立していないという状況があり、ドナーもこうした流れに配慮した記述にならざるを得なかったようにも思える。

以上はあくまでも評者が本書を一読した上でざっと抱いた感想であり、本書の評価は今後、広く読者にゆだねるべきものである。ウマイヤ朝についての概説書がほとんどない中（欧文も少ない）、貴重な情報が満載な本書は初期イスラム史研究に多大な貢献をするものと確信している。訳文も読みやすいものである。訳者の労苦に重ねて敬意を表したい。